



ルツは出かけて行き、刈り入れをする農夫たちの後について畑で落ち穂を拾ったが、そこはたまたまエリメレク一族のボアズが所有する畑地であった。

(ルツ記 2 章 3 節)

2 学期の授業で旧約聖書からルツ記を読みました。士師記、サムエル記という、いずれもイスラエルの歴史が記されている書の間に置かれている書です。

ルツ記は全部で 4 章、とても読みやすく、「この後一体どうなるのだろう」とハラハラ・ドキドキする内容です。そして、ハッピーエンド（ネタバレすみません）なので、安心して最後まで読むことができます。

主人公のルツはイスラエルの隣国モアブの人物で、イスラエルから飢饉を逃れ、移り住んだ家族に嫁ぎました。ほどなく、一家の大黒柱エリメレクが亡くなり、ルツの夫を含む二人の息子たちも相次いで亡くなるのです。悲しみと苦しみの中、嫁たちに別れを告げ、母国に帰ろうとする姑ナオミに「あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神。」と言ってルツはついて行きます。嫁ルツと姑ナオミの美しい関係に心を打たれる場面です。ナオミの一見厳しく見える言葉の裏にルツともう一人の嫁に対する愛情が表れているように思います。

さて、神はイスラエルの人々に収穫に関する戒めを与えていました。

「穀物を収穫するときは、… 収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。… これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。」(レビ記 19 章 9-10 節)

これは人々の状況をよく知っておられる神の、配慮に満ちた戒めです。イスラエルに到着したばかりのルツは、ナオミと自分が食べるために、落ち穂を拾いに麦畑に出かけました。そして、冒頭のみことばが続きます。「そこはたまたまエリメレク一族のボアズが所有する畑地であった。」

ナオミと共にモアブから来たルツについて聞いていたボアズは、一生懸命に働くルツに心を動かされ、「他の畑に行かなくてもいい。この畑にとどまるように。水も自由に飲んでいい。」と言って、とても親切に対応します。その親切は同情心というよりむしろ、神への信仰に心を動かされたことから来るのがボアズの言葉でわかります。「どうか、主があなたの行いに豊かに報いてくださるように。イスラエルの神、主がその御翼のもとに逃れて来たあなたに十分に報いてくださるように。」(2 章 12 節)



やがて、二人は結婚し、生まれる子オベドが、イスラエルの王ダビデの祖父となると記され、物語は閉じられます。この系図は何とイエス・キリストにまで続きます。

興味深いことに、記者はルツが行ったのがボアズの畑だったことを「たまたま」と表現します。これは、ルツもナオミも知らなかったことを表わすのでしょう。後にそのことを知ったナオミは驚き、主のお計らいに感謝します。

実は「たまたま」と思われる出来事に、はかり知れない神の計画があるのです。

私は公立高校に行くつもりで、「たまたま」中学の友達が受けると言った私立高校を受けることにしました。試験の結果、公立の道が閉ざされ、私立清教学園高等学校で学ぶことになりました。これは私にとってはかけがえのない大切な3年間となりました。また、宣教師になることを願いつつ、進んだ大学で、一年後輩に「たまたま」、同じく宣教師志望の人が入ってきました。後に結婚し、一緒にタンザニア宣教に向かいました。私は神のお計らいに心から感謝しています。

あなたの人生において神はどのような計画を持っておられるでしょうか。それはあなたにとっても「たまたま」と思われる出来事を通して、実現していくのかもしれませんが。